

「龍神とまぐわいなさい、流冰」
リュウビン

父である皇帝からそう告げられ、流冰は間の抜けた返事が喉まで出かかった。ぎりぎりのところでそれを飲み込み、肯定の意を告げようと口を開く。たとえ皇太子であろうと、認められている返事は「御意」ぎよいのみだ。

しかしさすがに理解が追いつかず、流冰の喉はぴくりとも震えない。本来ならばこの沈黙すら許されないが、皇帝は理解を示すように深くうなずく。

「信じられない気持ちにはわかるぞ。私も先帝に同じことを言われたときは耳を疑った。しかし、これにはわけがあるのだ」

わけがあつてくれなければ困ると思ひながら、流冰は膝ひざをつき、顔を伏せた姿勢のまま皇帝の言葉を待つ。

「我が帝国は長い歴史の中で、幾度いくどとなく他国からの侵略を受けた。そのたびに危機を退しりぞけてきた、大いなる力を知っておるな？」

「龍神様のお力にございます」

普段は全く使わない、寒氣さむけがするような柔らかい声色こわいろで流氷は答える。皇帝は力強く

「うむ」とうなずく。

「その通りだ。数千年にわたり帝国が形を保っていたのは、龍神の力に他ならない。そしてお前も知つての通り、龍神の力を使えるのは龍神本人と、その血を引く我ら皇帝一族のみだ」

（そうだ。その力を強めるために、龍神の血などというクソまずいものを毎日飲んでいるのだからな）

流氷は心の中で悪態をつくが、表には毛ほども感情を見せない。皇帝も流氷の心の内な
ど気づいていないようだ。

「世界中で機械化が進み、強力な兵器開発が進む今、歴代最強と言われるお前の力でも国を守るには足りん。より濃度の高い龍神の力を体内に直接流し入れることで、力を高める

必要がある」

（その方法がまぐわいだと……？）

なるほど、とすぐに納得することはできない。とても信じられない上に、龍神の力を体内に流し入れるということは、つまりは自分が組み敷かれるということだ。

（皇太子たるこの俺が、神が相手とはいえ下になるなど……）

流氷の心の中に、じわじわと苛^{いら}立ちが募る。しかし流氷の意思に関係なく、皇帝は命令を下すように流氷に手を向ける。

「流氷よ。帝国の繁栄のため、その身を龍神に差し出せ。これは私も先帝も、それより前の皇帝たちも行ってきた、正統な儀式である！」

「御意」

流氷はようやく、その一言を口にすることができた。当然不本意ではある。しかし皇帝の命令である以上、従う以外の選択肢はない。仮に拒否できたとしても、皇位継承権^{こういけいしょうけん}を

失う恐れがある。

袖に隠した両手を掲げ、流氷は立ち上がり一礼する。そのまま去ろうとした流氷を、皇帝は短く呼び止めた。

流氷はちらりと皇帝の表情を盗み見る。皇帝は長い袖で口元を隠し、くねくねと体を揺らしている。

「抵抗はあると思うが、その……。意外と、悪くないぞ」

立派なひげを蓄えた大男が、乙女のように頬をほほ紅く染めている。その姿にうすら寒さをあか感じながら、流氷は一礼して正殿を後にした。

く*く*く　く*く*く　く*く*く　く*く*く　く*く*く　く*く*く

龍神の間は、夜空のように美しい空間だった。一面の群青ぐんじょうの中に、きらきらと氷のか

けらが舞っている。室内はひんやりとして、寝衣しんいに近い絹の装束を纏まとう流氷には、少し肌寒い。

（こんな異空間のようなどころでするのか……。寝台はあるのか？　そもそも龍神はどこにいる？）

流氷はあくまで気品に満ちた出で立ちで、広大な空間をしずしずと歩く。室内のどころに氷を模した造形物があり、光の反射を受け淡い光を放っている。しかし寝具のようなものは見当たらず、儀式のための設備が整っているようには見えなかった。

理解が追いつかないまま奥へと歩いていると、それは突然現れた。

まるで小高い丘のように、巨大な龍がとぐろを巻いて眠っている。揃そろった鱗うろこと枝分かれした二本の角は氷の彫刻のようで、とても生き物には見えない。しかしそれが龍神であることを、流氷は一目で理解した。

（これと、するのか……？）

あまりの大きさに流氷は困惑する。こんな巨体にのしかかられたら、一瞬で圧死してしまっ
まうだろう。

皇帝の命を受けてから今日までの二週間、流氷は龍神を受け入れるための準備を整えて
きた。肛門^{こうもん}拡張や浣腸^{かんちょう}は恥辱^{ちじよく}の極みに思えたが、痛みを伴うよりはましだと耐えた。

しかしこの大きさは想定外だ。もし龍神のものが巨体から想像できる通りの大きさなら
ば、流氷の肛門は張り裂けてしまっ
まうだろう。

（からかわれたのか？　しかし陛下はたちの悪い冗談を言う方ではない。あの少々気色の
悪い頬の赤らめも、真実のように見えた。だが、そもそもこいつに生殖器官はあるの
か？）

流氷は疑いのまなざしで、龍神の体をまじまじと眺める。そのとき、龍神の長い睫毛^{まつげ}が
ゆつくりと持ち上がった。

流氷の身長ほどはあろうかという大きな瞳に睨^{にら}まれ、流氷の足が一瞬^{すく}竦む。しかし気圧

されるまいと、流氷は気丈に睨み返す。

龍神は数回瞬きをして、大きな口をゆっくりと開く。

『ああ……もうそんな時期か。時間の流れは早えなあ』

低く、空間を震わせるような声が響く。龍神の凍てつくような藍色の瞳が、髪の毛の長い端麗な青年の姿を映す。

『なかなか可愛げがありそうじゃねーか。少しは楽しめそうだな』

「なっ……！ 貴様、次期皇帝たる俺に向かって、何という口の利き方だ！」

龍神の近代的な口調に驚くより、自尊心が先立ち流氷は声を上げる。龍神はおかしそうに、にやりと口の端を上げる。

『おつ、威勢がいいな。お前こそ、龍神様にそんな口利いていいのか？』

「ぐっ……」

龍神はその名の通り、人間の身分制度の枠を超えた神だ。皇帝よりも上位の存在であ

り、人間である流氷が馴れ馴れしく口を利いていい存在ではない。感情に任せた失態に、流氷は苦々しく口を噤む。^{つぐ}

龍神の大きな瞳がずっと閉じられる。すると大きな体は、みるみるうちに人間と同じ大ききまで縮んでいく。流氷が驚いている間に、龍神の姿はたくましい青年へと変貌していった。^{へんぼう}

褐色の肌に、面積の少ない青い布地が映える。^{たてがみ}鬚のようにたつぷりとした髪は、この広間の造形物と同じく、氷のような輝きをまとっている。一見すると整った容貌の背の高^{ようぼう}い青年だが、額から生える樹氷のような二本の角が、彼が人ならざるものだと思ひ出させてくれる。

龍神は長い髪をなびかせ、裸足をぺたぺたと鳴らしながら流氷に近寄る。

「さーて、始めるか。お前、名前は？」

「……流氷」

「おつ。素直じゃねーの。さっきまでの威勢はどうした？」

「龍神様に対して、適切な物言いではなかったと……」

「身分のこと気にしてんの？ さっきは言葉の綾で意地悪言っただけだって。あんな不遜な態度でも、全然気にしねえから。な？」

「それは気にしている奴の言い方だぞ！？」

思いのほか軽い龍神の態度に、流氷は困惑を隠せない。漠然と想像していた神という生き物より、ずいぶんと親しみやすそうな雰囲気だった。

流氷は龍神の言葉をあえて額面通り受け取り、不遜な態度に切り替える。

「やるならとつとと始めるぞ。貴様と馴れ合いに來たわけではない」

「つれねえなあ。まあ、いいけど」

流氷はベッドを探そうと、龍神の隣を通り過ぎようとする。しかし突如龍神に肩を掴まれ、無理やりに龍神の方へ体を向けさせられる。

抗議の声を上げようと口を開いた瞬間、目の前に龍神の美しい顔が迫ってくる。

「ん！？」

気づいたときには、流氷の口は龍神の唇に塞がれていた。突然のことに驚き、思わず流氷は思考を止める。

口づけをされたのだと気づいた途端、流氷の顔に煙が出そうなほど熱が集まる。

（貞操は致し方ないとして、唇まで奪われるなど……！！）

流氷は必死に、龍神のたくましい胸板を押し返す。しかし龍神の手が腰と後頭部に回り、密着度合いは増すばかりである。流氷もそれなりに鍛えてはいるが、龍神との体格差の前では無力だった。

呼吸が苦しくなり口を開くと、すかさず舌を差し込まれる。口内を舐めまわされ、逃げようとした舌がするりと絡めとられる。

くちゅくちゅと唾液が絡まる音が脳に響く。本番はこれからだと言うのに、流氷は既に

体内を犯されているように錯覚する。

しばらく口内を堪能された後、龍神の唇がゆっくりと離れる。龍神は肩で息をする流氷をからかうように笑う。

「なかなか可愛い反応するじゃねーの。そんなによかったか？」

「いいわけがあるか！！」

流氷は拳で乱暴に口元を拭う。気づかないうちに垂れていた唾液が、手の甲をねつとりと汚す。

龍神は意地の悪い笑みを浮かべ、流氷の股間に指を向ける。

「よくないって言うなら、それはなんなんだ？」

そこは布地が盛り上がり、流氷の体が反応を示していることは明らかだ。流氷は羞恥しゆうちに顔を赤くし、隠すようにそこを手で覆う。

「これは、その……」

「隠さなくていいって。生理現象だもんな」

龍神が強引に流氷の手をどけ、盛り上がった布地を下から上へとなぞる。ぞわぞわとした感覚が走り、流氷の喉から意図していない声が小さくこぼれる。

「んっ」

「声、我慢しなくていいぞ。外には聞こえねーから」

「そういう、問題じゃ……」

龍神の間は城の地下に隠されており、用がない限り近寄るような場所ではない。現在は流氷の従者が扉の外に控えているが、扉の厚さからして、中の音は聞こえていないだろう。

龍神に何度もこすられるうちに、流氷のそこは硬さを増してくる。逃げようと一步後ずさるが、龍神に腰を抱かれ、身動きが取れなくなる。

こすっていた龍神の手が、装束の合わせから中へと侵入する。龍神の大きな手が、蜜を

こぼし始めたそれを優しく包み込む。

「おい、待て！　俺が出す意味はないだろう！」

「え？　どうせなら気持ちよくなった方がよくね？」

「良くない！　早く終わらせろ！　この俺がわざわざ抱かれに来てやっているのだぞ！？」

「お前、ほんつと偉そうだなあ。でもそんなに言うなら入れてやろうかな」

龍神の手が装束の中から出ていき、流氷はほっと息をつく。しかし安心したのも束の間、龍神は流氷を横抱きで軽々と持ち上げる。

突然のことに驚き、流氷は咄嗟に龍神の首にしがみつく。龍神は「おっ」と楽しげな笑みを浮かべる。

「そんなに強く抱き着いてくるとは。可愛いことするじゃん」

「落ちるからだろうが！！」

「落とさねーよ」

龍神は流氷を抱えたまま、部屋の奥へと足を進める。しばらくすると、群青色の敷布に覆われた寝台が姿を現す。薄青い帳とほりに覆われたそれは、皇太子である流氷の寝台よりも大きい。

龍神は膝を立てて寝台に上がり、少々乱暴に流氷の体を放る。流氷は勢いで龍神の首から手を放してしまったが、落ちた先は普段流氷が眠っている環境より柔らかい。

流氷が驚いている間に、龍神は流氷の足元に移動する。龍神は曲げられた流氷の膝を掴むと勢いよく左右に割り開いた。

「ひっ……!!」

足を大きく開く姿勢になり、流氷は反射的に膝を閉じようとする。しかし龍神の強い力で押さえつけられ、それは叶わない。

足を開かれたときに衣の裾すそが開き、何も身につけていない秘部が冷たい空気きうに晒され

る。流氷は羞恥と恐怖に襲われ、露出した下半身から咄嗟に目を背けた。

直後、少し萎えた己に、熱いねっとりとした感覚が這う。それが龍神の舌だと気づき、流氷は敷布を強く握りしめる。

（耐えろ。耐えていれば、きっとすぐに終わる……）

流氷は何年かぶりに、逃げ出したい衝動に駆られる。しかし皇帝の命令である以上、逃げることは許されない。

そうしている間にも、龍神の舌は流氷自身への愛撫を続ける。大きく全体を舐めあげられ、袋を口に含まれる。柔らかく噛むように揉まれると、流氷の体はじんわりと熱を持ち始める。

「ふっ……んん……」

しばらくそうしているうちに、流氷は自分の中に快楽のようなものが芽生えていることに気づく。苦しみに近かった呻きは、いつの間にか熱い吐息に変わっている。そんな自分

を認められず、流氷は上半身をねじり、敷布を引き寄せて顔を埋める。

ようやく龍神の舌が離れ、流氷はほっと息をつく。しかし安心したのも束の間、下の閉ざされたすばまりに、先ほどと同じ熱が這う。

「貴様っ……そんなところを舐める気か!？」

「濡らさないと痛いだろ？」

「香油を塗ってある!　舐めなくても……ひっっ!」

制止の声も虚しく、熱い舌が体内に侵入してくる。浅いところを舐められ、徐々に奥へと入り込んでくる。この日までにさんざん準備をしたおかげか、痛みはそれほど感じない。

やがて抜き差ししていた舌が抜かれ、代わりにごつごつとした細いものが入ってくる。龍神の指と思われるそれは、すぐに一本から二本に変わる。

その指がある一点を掠めたとき、流氷は脳内に電流が走るような衝撃を受けた。

「ふああ！？」

思わずこぼれた高い声は、自分のものだと思いつくのに数秒かかった。

流氷が呆然としていると、龍神の指が再び同じところに触れる。流氷の腰がずんと重くなり、中の指をぎゅつと締め付けていることが流氷にも感じ取れる。

「え？　なに……あつっ！」

「ここがお前のイトコロ。覚えたか？」

龍神の指が執拗しつようにそこをこする。そのたびに流氷の腰が跳ね、意思を持ったように中がうごめく。

龍神の二本の指がそこを挟み、押しつぶす。トントンと何度も押され、流氷の視界がばちばちと白く明滅する。

「んんっ、あつ、ああつっ！！」

混乱を極めた頭は、これが快樂だということも理解できていない。流氷はただ翻弄され

るままに、熱い息を吐きだしている。

やがて、いつの間にか三本に増えていた指が引き抜かれる。そこはぼっかりと口を開き、流れ込む空気の冷たさにびくりと震える。流氷は溜まった熱を逃がそうと、肩で大きく息を吐いた。

流氷の足元から衣擦れきぬずの音が聞こえてくる。いよいよ訪れるその瞬間に、流氷は緊張と不安で身を固くする。

「力抜いた方が痛くねーぞ」

そう言われて簡単に力が抜けるのなら苦労はしない。武術をしているときにはわかる筋肉の動きが、今の流氷にはさっぱりわからない。

解された入り口に、熱くて太いものがあてがわれる。それを直視する勇氣はなく、流氷は袖で目元を覆う。なんとか落ち着こうと息を吐くが、流氷が覚悟を決める前に、それはゆっくりと入口を押し上げてきた。

「おっ、いいつつ」

想像以上の質量に快楽が引き、痛みが押し寄せてくる。流氷は痛みにも耐えるように袖を噛み、鼻から大きく息を吐く。結合部から、ミシミシと肉が引き裂かれる音が聞こえた気がした。

「あー……。まだ痛かったか。悪い。大丈夫か？」

龍神が動きを止め、流氷の顔を覗き込んでくる。流氷は口から袖を離し、生理的な涙にぬれた瞳で鋭く龍神を睨む。

「大丈夫なわけがあるか、馬鹿者……!!」

視線が合った龍神は、なぜかぽかんと口を開けている。流氷が不思議に思った次の瞬間、中を塞ぐ龍神のものがむくりと質量を増した。

「貴様……っ！ 痛いと言っているのになぜ大きくする！？」

「ごめん。本当にごめん。不可抗力」

「不可抗力だと……あっ！」

流氷が抗議しようとする、一度萎えた己を龍神の手に掴まれる。ゆるゆると上下にこすられ、そこは再び熱を持ち始める。

「こっちに集中してろ。そしたら多少マシになるから」

「そんな、な、うんんっ」

「そんなわけがない」と言おうとした声は、大きな手の心地よさに遮られる。絶妙な力加減で上下されると、それはあっという間に硬さを取り戻した。

そうしているうちに、徐々に龍神が体内に入ってくる。内臓が押し上げられるような圧迫感を覚えながらも、先ほどまでよりは幾分かましになっていると流氷は思う。とはいえ、違和感がないわけではない。龍神の言う通りにすることを癪しゃくに思いながらも、流氷は快樂きようじゆを享受する己に意識を向けた。

だんだんと、痛みと快樂の境目がわからなくなっていく。しばらくして、龍神の動きが

ぴたりと止まる。

「ここまでが限界だな。よしよし。よく耐えたな」

龍神の大きな手が、流氷の頭を撫でる。いつもなら振り払うその手に、流氷は不思議と安心感を覚える。

しかしやはり矜持きやうじが許さず、流氷はやんわりと龍神の手を払った。

「子ども扱いするな。俺はもう十八だ」

「そっか。悪い悪い」

全く悪いと思っていなさそうな調子で龍神は笑う。撫でていた手の低い温度とは裏腹に、中で脈打つ龍神は溶けそうなほどに熱い。

龍神はゆるゆると、回すように腰を動かし始める。再び訪れた異物感に流氷は呻くが、先ほど龍神が見つけたイトコロがこすれ、流氷の腰がビクンと跳ねた。

「あつ……!!」

龍神は腰を引き、カリの部分でそこを集中的にこすり上げる。流冰は口を引き結ぶが、鼻から漏れる熱を抑えることはできない。

「んっ、ふっ、んんっ！」

腰の帯がいつの間にか緩み、流冰の白い腹が露わになる。鍛え上げられたそこを、反り返る己が蜜をこぼし汚していく。

次第に龍神の腰つきは激しくなり、最奥までを勢いよく貫かれる。苦しいだけだったはずの行為は快楽に塗り替えられ、流冰の口から抑えきれない声がこぼれる。

「あっ、んっ、ああ、ああん、あああっっ！！」

パンパンと肉がぶつかる音が、広い空間を覆うように響く。流冰は長い髪を振り乱し、低めに結った髪紐が緩む。気づけば羞恥や屈辱といったものは消え去り、流冰はただ訪れる快感に酔いしれる人形と化していた。

やがて龍神の動きが激しさを増し、限界に近いことを知らせる。

龍神の低く掠れた声が耳に響く。流氷は返事もできないまま、ただ嬌声きょうせいを上げることしかできなかった。

最奥が熱くなると同時に、流氷の中心が勢いよく熱を吐き出す。つま先がピンと伸び、

体が電撃を浴びたように痙攣する。けいれん

[illegible]

まぶた